日本医史学雑誌第二十八巻三号
昭和五十七年七月三十日発行

昭和五十七年一月二十一日受付

古京出土遺物の医史学的研究（その二）
人形・人面墨書土器について

樋口　誠太郎

一、はじめに

先号において、主として「木簡」についての概要と見解を述べたがここでは、その他の出土物として「人形」と「人面土器」についてふれることにする。

人形は「形代」といわれ「人形」といわれたのは鎌倉時代以降のことであろうと一般には推察されている。くわしくは次にふれるが、人形は考古学的な調査の結果からみればすでに縄文文化の中にみられているし、人間は往古よりこうした呪術的なことを行っていたのであろう。それは病気などにかからないようにするためとか、或いは「人を呪う」行為のものとして用いられたりその意味はいろいろある。また用途の多用性は平城京発掘調査の過程で出土した数多くの人形が具体的に示しているであろう。

また「人面墨書土器」は、明確な用途は判然としないが、そこに人間の顔が描かれていることや、その他古墳の発掘調査の結果などから考証して、「まじない」に用いられたものであろうと考えられ、しかも、人面の部分が黒くぬられていて、そこが故意に打ち破られたものがあることなどから、これは病気と関係があるであろうと推察されている。しかし、人面土器には特定のだれかを「のろう」目的はなかったであろうと考えられる。

かつて、『思想』一九七九年三月号（岩波書店刊行）に西ドイツの歴史家、ビーレエフェルト大学教授・ラインハルト・コゼレック氏の「学際研究と歴史学」という講演の内容が紹介されたことがあった。その最後のことばとして「歴史家が今日そういった関連を専門として研究している学問の中に、積極的に入って行くことです。どうして文書史料を読んだり解釈したりする際に助けとなる文献学だけが私たちのパートナーでなければならないのでしょうか。すべての学問が私たちのパートナーであります。なぜなら、立場を変えてみればどんな学問も歴史的地平なしには成り立たないのですから。」と結んでいる。

医史学の研究もラインハルト・コゼレック氏の視点に立てば、考古学研究の成果に注目し、学際的研究を展開することにより従来より広く、しかも深く研究の触手を伸ばすことができるのではないかというのが私の考えである。

一、人形について

人形とは、大体が薄板を人の恰好にきりぬいて頭・手・足をつけ、髪や目・鼻を墨で描き病いや穢れを人形に肩代りさせて、自分の禍いをとり除くという呪法に用いられたものである。「水に流す」ということばがあるが、みやこに住んだ当時の人々は、自分にふりかかった禍いや穢れをとりのぞくために、文字どおり「水に流した」らしく、平城京の井戸や溝から、このような人形が出土している。

このような行事として知られているものに「大祓」（大解除とも記す）という。文献に記されたものとしては、天武天皇五年（六七六）八月一六日のものが初見であろう。したがって一般にはこのような呪術が中国との交流により日本に入り「大祓」などの宮延儀式になったり、医療法の呪術として定着したと推定されている。

「大祓」の儀式は六月と一二月の晦日に実施されるが、疫病の流行や天災地変のおこったときには臨時にもおこなわれた。六月は「夏越の祓」と称し、一二月は「年越の祓」と称し人形や形代を神社に納めたりした。しかし習俗としてはも

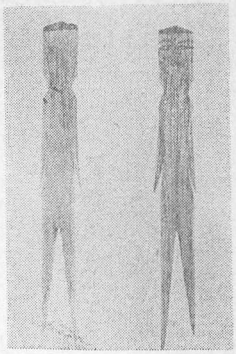


写真 1　平城京址出土「人形」（その1）

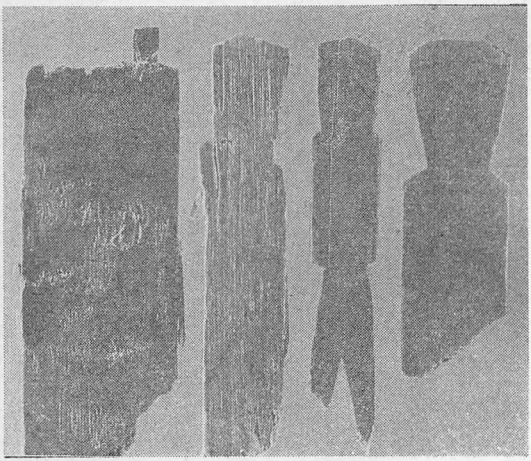


写真 2　平城京址出土「人形」その2

っと古くからあったことは前に記したとおりである。

また「人形」は従来の祭祀とは異なった個人的な悩み――病気などはその良い事例であろう――を救うものとして、都市のように大勢の人が集まり多種多様の願望が存在するところで、それを充足させる方法として用いられたことは興味あることである。

昭和五六年一一月の『月刊文化財』（文化庁文化財保護部監修）の表紙は平城宮壬生門前の大路側溝（二条大路北側溝）から出土した二〇七点の木製人形の写真を用いていた。（写真3）

その解説によると次のとおりである。

『これらは主に短冊状の板材を切り欠いて正面からの全身像をあらわしており、大きさ、頭部や手足の形態、顔の表現法や表情など驚くほど多様である。長さは六・四センチ～三〇・八センチで全体的な規格性はない。顔の表現法には刻みと墨描きとがあり、稀に刻みの上を墨描きする例もある。墨描きの場合には眉、目、鼻、口に加え、耳、髪、口髭、顎髭や頭部の冠帽、体部のへそ、乳房、胸毛、脛毛まで描く例、胸元で合掌した姿や、たすきがけの姿を表現した例、表面に呪語、裏面に「重病受死」と墨書した例などがある（以下略）』

このような「人形」は禊や祓に用いた祭祀具で息を吹きかけたり撫でさすったりして、身のけがれを移し水に流したものと推定されている。

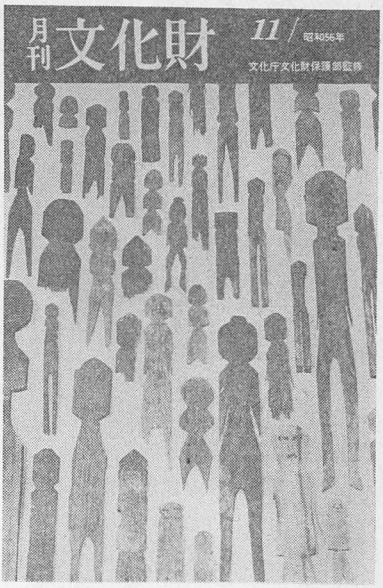


写真 3　平城京出土「人形」を掲載した月刊文化財(昭和56年11月号)

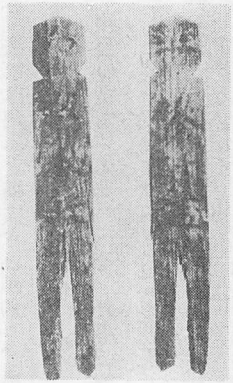


写真 4　「のろい」に用いられたと推定される人形(平城京出土)

前に記した古代宮廷儀礼のひとつである「大祓」に関しては、藤原通憲入道信西が撰集した『法曹類林』(国史大系本)巻二百式部文の中に「六月十二月二晦、百官会集。大祓儀。其日平旦大蔵、木工、掃部、帳幄鋪設。於二大伴、壬生二門間大路一各有二常儀一。」と記されている。平安京における壬生門は弘仁九年(八一八)に「美福門」と改称されるので、『法曹類林』のこの記述はそれ以前の古い形式を記したものであろう。平城宮出土の人形が平城宮の南面東門から壬生門とこれに接した南面大垣を東西にはしる二条大路の溝から出土したことは、大祓の儀式を具体的に知る重要な手がかりともいえそうだ。

また「人形」は病気などをなおす呪術として用いられる一方では、相手を調伏し自己の利益を守ろうとするいわゆる「呪詛」のためにも用いられた。「人形」を傷つけることにより相手を「呪殺」することができるということである。

『月刊文化財』(昭和五六年一一月号)の表紙解説を前に引用したがその引用文の文末にある「人形」の表に「呪語」を記し裏には「重病受死」とあるものなどは、あるいは「のろい」の人形であろうかとも考える。

かつてフレーザー（J.G. Frazer）は呪術的行為を類感呪術と感染呪術にわけて説明し前者は農耕作業の模倣行為を身体表現する（おどりなどもこの中に入る）ことにより、豊作を祈ることなどをあげ、後者はかつて触れあったものは、その後も互いに作用しつづけるということで人形で身体を撫でて身のけがれを移し水に流す行為などはこの中に入ると思われる。しかし、実質的にこの双方がはっきりと区分されるものではなく互いに関連しあっているのが一般的でもある。

人間が門閥などの特殊集団を形成し互いに利益を保持しようとすれば必ず疎外される者も出現するであろう。しかし自分の敵とみなされるものに直接手をくだせば犯罪者である。しかし「呪殺」ということになれば全く表面にあらわれずに目的が達成されるのであるから、人が多く集まり利害関係が複雑にからみ合った「みやこ」の生活では決して珍しいことではなかったと思われる。このような「のろい」の内容は相手を病気にかからせて死に至らしめることが狙いであったようだ。

三、人面墨書土器について

古代人の「疫病観」というのは、「けがれ」とか「神仏の意にさからった」ということが原因で病気にかかると考えていたらしい。科学の発達していない時代の「病因論」としては当然のなりゆきであったともいえよう。

このような時代に人々は病気をなおす方法として薬湯を服用する治療行為も多少はあったが、多くは「呪術的行為」に依存していたのである。

そのひとつは「人形（ひとかた）」にもあらわれているが、ほかに平城宮出土物のなかの「人面墨書土器」といわれる器物も注目すべきものであろう。

人面墨書土器には大きく分けて二種類ある。そのひとつは壺状の土器の表面に人の顔を墨で描いたものである。「よみがえる奈良――平城京」という図録の中に（三四頁）「人面を描いた土器は疫病神をあらわす。気息を壺に封じ込めて水に

流せば祟りからのがれることができる……。」と記されている。

写真 5　平城京址出土「人面土器」
（平城京左京八条三坊出土）

病気は「疫病神」がもたらすということは、歴史のなかでは、かなり長い間信じられてきたことである。ここにあげた壺状の人面土器は、現在でいうならば病気のもとの「疫病神」を封じこめたカプセルであるということができよう。（写真5）

『延喜式』をみると「大祓」の際に天皇に中臣氏の女が小石を納めた「鈴の如し」と表現される壺を捧げ、天皇はこの壺に節季の未の弱まった息を吹きこみ、その息をこの小石にとりつけ壺の口を紙で封じ川に流すということが記されている。そのとき用いる壺には人面が記されているかどうかは判らないが、壺を用いていることは注目すべきことであろう。

また他には、皿状の人面墨書土器もありこの場合は皿の内側へ人面を墨書している。また皿の場合、顔の部分に墨で黒くぬった部分がみられ、その黒い部分が打ち抜かれているものがあり、これはおそらく黒い部分が患部なのではないかと思われる。患部にあたる部分を打ちくだき水に流せば病気が良くなるという発想であったものとみてよいであろう。（写真8）

壺でも皿でも人面を墨書した土器は、療病のためとか、「けがれ」をとり除く目的で使用されたものであろう。

このような「人面墨書土器」は平城宮の場合は側溝などのあとから出土するので、おそらく「大祓（おおはらえ）」の儀式で用いられたりあるいは、それにならって庶民も病気にかかったときなど個人的にとり行ったものらしい。

たとえば平城京羅城門の南、約一キロほどのところにある稗田阿礼（ひえだのあれ）に関係のある「稗田遺跡」での調査によれば、ここの大溝内からは七〇点にも及ぶ「人面墨書土器」が出土していることから奈良・平安時代にかけ、このような医療法としての呪術が当時の「みやこ」やその近辺に住む人々の間に深く浸透して流行したものとみなされるのである。

また地方ではどうであったかということについて考証すると当時の律令体制のもとでは中央、すなわち「みやこ」に住む人々が国司などになって地方に赴任するので、中央の風習は当然それらの人々によって地方に伝播すると考えるのであるが、地方での発見例はそう多くはないがいくつかの事例をみることはできる。

昭和四十三年一月刊行の『月刊文化財』には千葉県佐倉市大字臼井字江原台の「江原台遺跡」から出土した人面墨書土器に関する記事がみられる。この土器は奈良・平安時代に位置づけられる土師(はじ)式土器で国分期の坏形(つきがた)土器に人面が墨書されたもので七〇戸ほどの当時の住居址のひとつから発見された。

この人面墨書土器は写真にみられるように住居址内のかまどの左(西側)床面の直上から発見された。

江原台遺跡から発見された人面墨書土器は次の写真に示したように人面が二つ描かれている。

『月刊文化財』に記されているこの人面墨書土器に関する説明によればこの土器は口径一一・七～一二センチで底径六・五～六・八セン

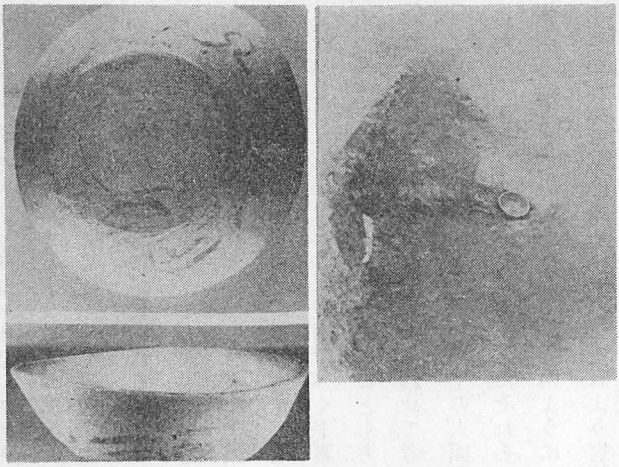


写真 6　佐倉市江原台遺跡人面墨書土器と出土状況

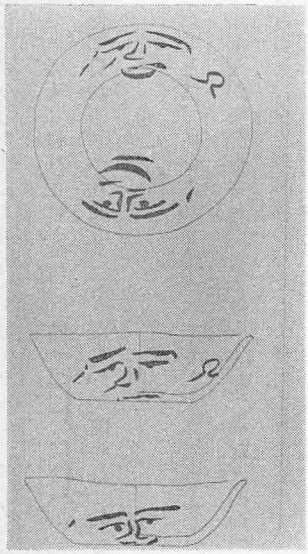


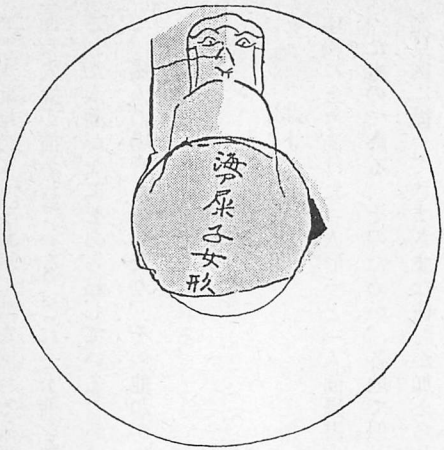
写真 7　佐倉市江原台遺跡出土人面墨書土器に描かれた人面の図

チ、器高三・三〜三・九センチで「ロクロ」を使用し底部の切り離しは回転ヘラ切りである。写真にみられるように人面は底面を中心に相対するように二つ描かれ口とみなされるものは底面にかかって描かれている。太い眉毛と平行に上瞼が描かれ、黒目の部分は点で描かれている。左目の外側にΩ状の耳か耳飾りのようなものが描かれている。頭髪は描かれていないが鬢のようなものが見られる。

江原台遺跡からこのような人面墨書土器が出土したことは、私がこれまで述べてきた人面墨書土器の考え方からすると全く異例という以外はない。これまで平城宮及びその周辺から発見されたものは大体が大溝など使用のされ方を傍証するものであるが、この場合は「水に流す」というようなことは全く無関係のかたちで発見されたもので、推理を許されるならば病気にかかったときに使用すべく平素準備していたものがさいわいにも使用しなければならないような不幸な状態がおこらずそのまま残されたということも考えられるであろう。いわば未使用の人面墨書土器の出土かということを住居の中から発見されたという条件とあわせて考えるのである。

この千葉県佐倉市江原台遺跡出土の人面墨書土器については佐倉市教委の田村言行氏がこれを掲載した『月刊文化財』の解説の中で「――過去に出土したそれらの遺物についていえることは多くは水と深い関係があるようで井戸あるいは河床から出土しているが今回の発見のように住居址に伴って検出されたのは、全国でも初めてであろう。しかも墨書される土器の種類は坏形土器はまれでそれより容積の大きい『かめ形土器』や『壺形土器』などが多い。これらの点をふまえてこの土器と比較してみると、遺跡の土地・出土状態・器形、など共通性に乏しく水との関係を論ずるのも無理があり、そうした面で特異なものといえよう。」と述べている。

当時人面墨書土器として用いられた土器は「かめ形土器」、「壺形土器」、「坏形土器」の他に皿状のものが用いられ皿状のものは内側に人面をひとつ描き、その他の場合は多く二つの人面を描いている。したがって江原台遺跡のものが「坏形土器」であるから変ったものであるということはいえない。日常用いられる身近な土器を使用したのであろうと思われる。



静岡県　伊場遺跡出土

図１　浜松市伊場遺跡出土人面墨書土器
（署名入り）
昭和53年１月『月刊文化財より』

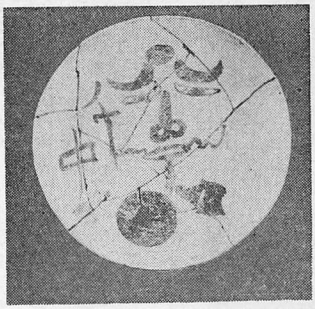


写真８　皿状の人面墨書土器
平城宮址出土(1961)

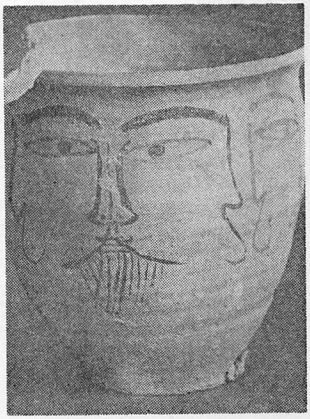


写真９　砂押川の河底から出上した人面墨書土器
（発掘された古代の東北より）

写真８の皿状の人面墨書土器をみると内側に描かれた人面が苦痛にゆがんだような表情をしており、患部かと思われる黒い墨ぬりの部分がみられて、そこが明白に打ち抜かれている。これなどは水中に投じるだけのものであろう。

それに対して「かめ形」、「壺形」、「坏形」など深鉢形式のものは、「疫病神」や「餓鬼」への賄賂を入れて水に流したりしたものであろう。これらのものには故意に打ちくだいたりした形跡は存在せず流れていくままに水が入り水没していったものであろう。

静岡県浜松市の伊場遺跡出土の人面墨書土器では皿の内側に女性の顔と上半身（図に示す）が描かれていて「海部屎子女形」という文字が記されている。おそらく病いを患い出家した尼僧の像容を描いたものかと推察されるが、わざわざ署名が入っているところなどは個人的な悩みの救済という面が強く出ている例として注目されよう。

また東北地方でも多賀城の西を流れる砂押川の河底から発見された人面墨書土器は深鉢形式で、写真にみられるように二面の人面が描かれている。これを水神を描いたとか病人の顔とか説明しているが、いずれの場合においても、そこに墨書された人面がなにをあらわしているのかはっきりと判っているわけではない。むしろ一定の基準は存在せず、目的によって、病人の場合もあったり、その他ねがいごとをする人物の顔であったり、祈願する対象を想像した容ぼうであったりしたのではないかとも考えられる。

四、おわりに

本稿にとりあげた「人形（ひとがた）」と「人面墨書土器」はいずれも最近平城宮址発掘調査が進展するにつれ広く知られるようになったものである。そのためか、各地で似たものが発見され関東から東北にまでその存在が確認されて、その用途も各地の発見例に従ってさまざまな検討が加えられていることは、ここに紹介したとおりである。

特に、これらが「疫病」など、個人にふりかかる「災い」を除去する「呪術的要素」をもっていることなどをあわせて考えるときに、古代人の「疾病観」を究明する上では大変重要な資料でもあり「医史学的視点」からこれを検討することが今後とも必要であろう。そのためには今後の考古学の発掘調査研究の進展によりさまざまな事例が出てくることがのぞましいことであって、現段階はあくまでもその過程における一応の見解ということにとどまるであろう。

前回は「木簡」を中心に、今回は「人形（ひとかた）」と「人面墨書土器」とについて自分なりの見解を提示したが、従来の古代の医史学的研究は、ともすれば文献以外に手がかりがあまりなかったといっても過言ではなかったが、文献に記述されていることがらを傍証する手だてが次第に出てきたことは、医史学研究のうえにひとつの突破口がひらけたといってもよいであろう。

本稿を作成するにあたり次の文献を参照した。

参　考　文　献
（1）法曹類林（国史大系本）吉川弘文館
（2）よみがえる奈良――平城京（図録）奈良国立文化財研究所監修
（3）月刊文化財　昭和五三年一月号・昭和五六年一一月号文化庁文化財保護部監修
（4）発掘された古代の東北（図録）東北歴史資料館

A Medico-Historical Study on Unearthed Remains in Ancient Capitals of JAPAN

by

Seitaro HIGUCHI

I reported on "MOKKAN" (wooden tablets) which have been fund in the ruins of FUJIWARA KYO and HEIJYOKYO (NIHON ISHIGAKU ZASSHI vol. 27, No. 4).

In this paper, I will discuss human figures "HITOGATA" and masks "JINMEN BOKUSHO DOKI". Both of them were used for the healing of illness or pain. These were found out from vestiges of ancient gutters, wells and ponds becuase they seemed to have been thrown into the water though these were also used for cursing other, which I have omitted in this paper.

For the purpose of doing away with illness or pain "HITOGATA" and "JINMEN BOKUSHO DOKI" were found not only in the ancient capitals but also in many places of JAPAN. In this paper,

I will discuss chiefly those from SAKURA-city, CHIBA prefecture. I hope to understand how the ancients coped with personal pain in this paper.